



多田良雄の42. 195

Vol.34

夏になるとなぜか思い出す光景が誰にでも有ると
思います。そんな光景の中の一つに小学校時代、以之削の
古い家で三つ上の姉と双子の兄と三人でクーラーのきかない
部屋で扇風機にあたりながら宿題をし、染みカのカキ氷アイス
を三人で食べたあの光景。部屋の柱にはやはり、背くらべ
の印が三人分ありました。

学生時代、その古い家を取り壊し、両親が新しい家を建て
直してくれました。住みこころはすこくいいし、快適です。でも、
しばらくすると、古い家でのその思い出の光景がすこく貴重
なものだ、た事に気がつくのです。家は新しく改竄になたが、
古い家での思い出は大切なもの、写真もほとんど残ってなく、
なにか懐かしさといとおぼしさが出てくるものです。

確かに新しいものは、良いが、使ってきたもの、古いものには
それなりの良さや思い出が、それ以外の家々に有り。

大切にしていきたいものです。何でもかんでも全て新しく
すれば良いということではなく、温政知新(古きをたぶね
新しきを知る)という考え方が大切なのだ、という事を、
あの夏のあの光景が、教えてくれたのです。

創業時にこついた事も感じ、地域で皆様の大切な
住まっつくりのお手伝いをやらせて頂ければと、この仕事に
打ち込む決意をさせて頂いた事、幸せな仕事を
やらせて頂いている事に、あらためて感謝させて
いただいております。ありがとうございます。

平成二十三年八月吉日 多田良雄